

生薬としても、食品・化粧水としても大活躍

ハトムギ (イネ科)

Coix lacryma-jobi Linné var. *mayuen* Stapf

部位	種皮を除いた種子
生薬名	薏苡仁 (ヨクイニン) 局方収載
成分	コイクシンデンA、B コイクセノライド (脂肪酸エステル)
薬理	抗炎症、抗腫瘍、抗ウイルス性疣贅作用
薬能	利尿薬、筋肉をほぐす (舒筋じょきん)
漢方	薏苡仁湯、麻杏薏甘湯など

雌花穂 ↑
(しかすい)



雄花穂 ↑
(ゆうかすい)



ベトナムなどの熱帯アジア原産とされる一年草。中国には後漢の武将であった「馬援」がベトナムより持ち帰ったとされています。学名の「*mayuen*」は、この故事に由来しています。日本への伝来については複数の説があり、よく分かっていません。江戸時代までは朝鮮麦、唐麦、シコムギなどと呼ばれていたそうです。また、日本には基準種のジュズダマ (*Coix lacryma-jobi* L.) が河川敷などに自生しています。ハトムギの種子全体を「鳩麦」(食品)、種皮を除いた種子を「薏苡仁」(生薬)と呼びます。日本では昔からウイルス性の「イボとり」として利用されてきました。また、漢方では、体表の湿(しつ; 浮腫みなど)を整える作用があるため、関節痛やリウマチなどに用いられる薏苡仁湯、麻杏薏甘湯などに配合されています。

アカネ (アカネ科)

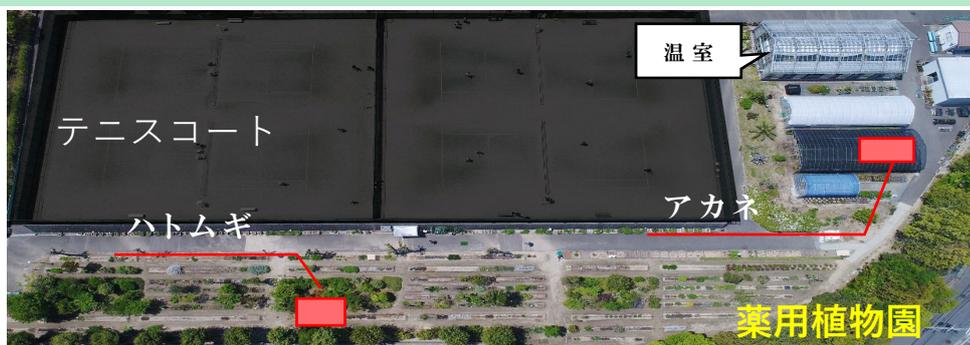
格調高い鮮やかな赤色の茜染め

Rubia argyi (H.Lév. et Vaniot) H.Hara ex Lauener et D.K.Ferguson

部位	根および根茎
生薬名	茜根 (センコン)、茜草 (センソウ)、茜草根
成分	プルプリン、アリザリン (アントラキノン、色素)
薬理	止血作用、利尿作用
用途	止血、通経薬 (現在はほとんど利用されない)



日本の本州から九州に分布しているつる性多年生草本。茎は四角柱で、稜には下向きの刺があり、他の植物などに引っかかって伸長していきます。葉は4枚が輪生しますが、そのうちの2枚は葉間托葉と言われるものです。8月~10月に黄緑色の小さな花が開花します。秋には5mm程度の球形の黒色の果実を付けます。赤みがかかった根はひげ根状で太く、生薬の茜根(センコン)として利用されました。一方、古来から染色材料としても使用されてきました。吉野ヶ里遺跡からは日本茜で染めた絹が見つかっています。現代では茜の色素であるアリザリンが化学合成されています。しかし、茜で染めた色には単色では出せない色調があります。正倉院宝物にも多く利用されており、正倉院展で茜で染めた鮮やかな格調高い赤色の美しさに触れてみては如何でしょうか。



ホームページでも
ご覧いただけます